

# 小児科

## 1. スタッフ

		(専門)	
科 長	(教授) 桃井真里子	神経	
副科 長	(教授) 白石裕比湖	循環器	
	(准教授) 山形 崇倫	神経	
外来 医長	(助教) 野崎 靖之	神経・遺伝	
病棟 医長	(講師) 福田冬季子	神経・代謝 内分泌	
病棟 医長	(講師) 金井 孝裕	腎臓	
医 員	(教授) 杉江 秀夫	神経・代謝 内分泌	
	(准教授) 高橋 尚人	新生児	
	河野 由美	新生児	
	森本 哲	血液・腫瘍	
	(講師) 森 雅人	神経	
	柏井 良文	血液・腫瘍	
	南 孝臣	循環器	
	(助教) 矢田ゆかり	新生児	
病院助教	横山 孝二	消化器・肝臓	
	小池 泰敬	新生児	
	佐藤 優子	喘息・アレルギー	
	西村 仁	新生児	
	伊東 岳峰	腎臓	
	小高 淳	腎臓	
	佐藤 智幸	循環器	
	門田 行史	神経	
	川又 竜	新生児	
	中村 幸恵	血液・腫瘍	
	青柳 順	腎臓	
	長嶋 雅子	神経	
	早瀬 朋美	血液・腫瘍	
	鈴木 由芽	神経	
	俣野 美雪	新生児	
レジデント	13名		

## 2. 診療科の特徴

当科は小児の総合診療及び多岐に亘る専門診療を担当している。総合診療部の担当する外来のほかに、神経、心臓、消化器肝臓、腎臓、代謝内分泌、心理、移植、血液腫瘍、膠原病、喘息・アレルギー、発達、遺伝、新生児の各専門外来もあり、子ども医療センター内の他科の小児専門外来とも連携をとって診療にあたっている。また、救急医療では地域医療機関と連携して、三次救急の受け入れの重要な役割を果たしている。

病棟は急性期病棟、慢性期病棟、周産期センター新生

児集中治療部門（NICU、GCU）に分かれ、それぞれ38床、38床、36床の計112床のベッド数を有している。子どもと家族のニーズに応じた包括的な小児医療と、各分野の指導医のもと、専門性の高い検査や治療など高度な医療を提供している。

### ・関連領域専門医認定施設

日本小児科学会研修認定施設  
日本小児神経学会研修認定施設  
日本人類遺伝学会研修認定施設  
日本超音波医学会研修認定施設  
日本てんかん学会認定研修施設

### ・認定医

日本小児科学会小児科専門医 桃井 真里子 他43名  
PALS Provider 白石 裕比古 他11名  
日本小児循環器学会小児循環器暫定指導医  
白石 裕比古 他6名  
日本小児神経学会認定小児神経科専門医  
桃井 真里子 他5名  
日本医師会認定産業医 桃井 真里子 他5名  
日本人類遺伝学会認定臨床遺伝専門医  
山形 崇倫 他2名  
CD制度協議会インフェクションコントロールドクター 柏井 良文 他2名  
日本周産期・新生児医学会専門医暫定指導医  
高橋 尚人 他1名  
日本がん治療認定医機構暫定教育医  
柏井 良文 他2名  
日本内科学会認定医 桃谷 孝之 他2名  
日本心臓病学会FJCC 白石 裕比古 他1名  
日本てんかん学会認定医臨床専門医 山形 崇倫  
日本東洋医学会専門医 桃谷 孝之  
日本周産期・新生児医学会専門医 高橋 尚人  
日本周産期・新生児医学会新生児蘇生法「専門」コース  
インストラクター 高橋 尚人  
日本血液学会指導医 森本 哲  
日本血液学会専門医 森本 哲  
日本臨床腎移植学会認定医 金井 孝裕  
日本がん治療認定医機構 がん治療認定医 柏井 良文  
日本消化管学会 胃腸科認定医 熊谷 秀規  
日本透析医学会専門医 金井 孝裕  
日本超音波医学会 超音波専門医 齋藤 真理  
BLS Provider 本間 洋子

## 3. 診療実績・クリニカルインディケーター

とちぎ子ども医療センターの1年間の小児科総合診療

部、専門診療部および入院診療実績について報告する。  
なお周産期母子総合医療センターのNICUについても一部併記する。

3-1. 外来診療

1) 新来患者数・再来患者数・紹介率

新来患者数	3,926人
再来患者数	36,107人
紹介率	43.4%

2) 小児科総合診療部外来

医師：桃井 眞里子(部長・兼)、白石 裕比湖(兼)、四元 茂(－8月まで)、杉江 秀夫(兼)、山形 崇倫(兼)、河野 由美(兼)、村上 智明(兼)、森本 哲(兼)、森 雅人(兼)、福田 冬季子(兼)、柏井 良文(外来医長・兼)、金井 孝裕(兼)、南 孝臣(兼)、矢田ゆかり(兼)、野崎 靖之(兼)、横山 孝二(兼)、佐藤 優子(兼)、増澤 亜紀(兼)、小高 淳(兼)、飯田 和美(兼)、中村 幸恵(兼)、青柳 順(兼)、長嶋 雅子(兼)

診療実績：

総合診療部は、小児科専門医がそれぞれの専門診療部と兼務で午前中の外来診療、午後の急患対応を行っている。原則として初診は紹介のみとしているが、直接受診される場合も多い。小児科は常に総合的判断を必要とするため、総合診療部で問題を把握し、適切な初期治療、あるいは検査を実施し、必要に応じて、各専門診療部に振り分ける機能と、しばらく総合診療部外来で診療後、地域かかりつけ医にお戻りする場合がある。全領域にわたる能力を必要とするため、ベテランの小児科専門医が担当している。発熱、けいれん、咳、喘鳴、腹痛、頭痛、嘔吐下痢、などの急性症状に加えて、最近では成長発達上の問題、不定愁訴、不登校、自律神経障害、などの診療も多い傾向にある。夏季には学校検診における二次精密検査の受診などで外来受診者が増える傾向にある。全体として外来受診者数は減少の傾向にあるが、地域における体制の充実の結果、夜間休日の救急受診者数が減少し、その翌日再受診がなくなったことの影響が大である。

2009年、月別患者数：( ) 内は2008年

	1月	2月	3月	4月
初診患者数	79 (85)	66 (69)	92 (89)	75 (83)
再診患者数	764 (834)	694 (834)	897 (891)	723 (830)
合計患者数	843 (919)	760 (903)	989 (980)	798 (913)
	5月	6月	7月	8月
初診患者数	73 (77)	110 (98)	114 (159)	94 (144)
再診患者数	632 (732)	742 (814)	707 (918)	681 (921)
合計患者数	705 (809)	852 (912)	821(1,077)	775(1,065)
	9月	10月	11月	12月
初診患者数	97 (97)	84 (103)	81 (62)	64 (82)
再診患者数	620 (838)	676 (958)	615 (925)	649(1,006)
合計患者数	717 (935)	760(1,061)	696 (987)	713(1,088)

2009年年間患者数：( ) 内は2008年

新患者数	1,029 ( 1,148) 人
再診患者数	8,400 (10,501) 人
合計患者数	9,429 (11,649) 人

3) 小児神経外来

医師：桃井 眞里子、杉江 秀夫、山形 崇倫、森 雅人、福田 冬季子、野崎 靖之、富士根 明雄、桑島 真理、飯田 和美、長嶋 雅子

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
1,000	899	1,105	1,077	780	1,114
7月	8月	9月	10月	11月	12月
1,079	1,068	1,011	1,107	992	1,109

年間総受診数12,341人

主な診療対象：

複数の疾患を持つ例が多いため、主要疾患の1か月受診者数の概数を記載する。てんかん 350-450人、脳性麻痺や脳炎等による痙性麻痺 100-150人、自閉性障害、知的障害、学習障害や注意欠陥多動性障害 350-400人、先天代謝異常症 約25人、染色体異常や中枢神経形成異常 約80人、神経皮膚症候群 20-30人、筋ジストロフィー、重症筋無力症などの神経筋疾患 30-40人、白質脳症、脊髄小脳変性症などの神経変性疾患 4-6人、チック障害、吃音、頭痛等 40-50人であった。この他、人工呼吸器外来において、18人の在宅人工呼吸器患者を診療している。

4) 遺伝外来

医師：野崎 靖之

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
13	10	18	17	19	20
7月	8月	9月	10月	11月	12月
20	21	15	20	20	19

年間総受診数 203人

主な診療対象：

Down症候群、染色体異常症候群、先天奇形症候群、骨系統疾患。

染色体異常、遺伝性疾患は、神経外来に通院している患者も多い。

5) 小児循環器外来

医師：白石 裕比湖、村上 智明、菊池 豊、保科 優、平久保 由香、森本 康子、齋藤 真理、飯野 真由

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
389	356	421	413	423	425
7月	8月	9月	10月	11月	12月
486	485	419	403	372	353

年間総受診数 4,945人

主な診療対象：

心室中隔欠損症、心房中隔欠損症、完全大血管転位症、Fallot 四徴症、肺動脈閉鎖症などの先天性心疾患の術前と術後、心筋症、不整脈、川崎病、心雑音の精査などを中心に外来診療している。また、小児科総合診療部外来で、初診や急患としての心疾患患者の受診に対応している。

## 6) 小児腎臓外来

医師：金井 孝裕、伊東 岳峰、小高 淳、齋藤 貴志、青柳 順

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
122	138	156	134	124	126
7月	8月	9月	10月	11月	12月
153	146	153	157	141	154

年間総受診数 1,704人

主な診療対象：

小児特発性ステロイド感受性ネフローゼ症候群40～45人、IgA腎症35～40人、膜性増殖性糸球体腎炎8～10人、巣状糸球体硬化症8人、膜性腎症3～5人、Alport症候群5人、膀胱尿管逆流症15人、その他、低形成腎、嚢胞腎、尿管細管アシドーシス、慢性腎不全(腹膜透析含む)などを診療している。

外来の特色：

急性血液浄化療法から、維持透析療法・生体腎移植まで、ほぼ小児腎疾患のすべてを守備範囲としている。また、他の小児専門診療科からの依頼を受けて、血漿交換療法や、G-CAPなどの体外循環療法も行っている。院外との連携では県内はもとより、群馬・埼玉・茨城・東京からも、紹介を受けた。また、小児科医では数少ない腎移植専門医(日本臨床腎移植学会)が勤務する病院として、県外子ども病院からも、将来の腎移植を視野に入れた紹介も受けた。

## 7) 小児代謝・内分泌外来

医師：杉江 秀夫、福田 冬季子、関戸 真理恵

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
98	110	96	124	94	129
7月	8月	9月	10月	11月	12月
103	106	114	89	120	91

年間総受診数 1,274人

主な診療対象：

先天代謝異常症スクリーニング検査の2次検査、先天

代謝異常症(OTC欠損症、ガラクトース血症、糖原病など)、高コレステロール血症、糖尿病などの代謝性疾患、および成長ホルモン分泌不全性低身長、副腎過形成、甲状腺機能低下症、バセドー病、思春期早発症、性腺疾患などの内分泌疾患が主体である。

## 8) 小児消化器・肝臓外来

医師：桃谷 孝之、熊谷 秀規、横山 孝二

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
68	86	107	84	72	92
7月	8月	9月	10月	11月	12月
72	105	77	73	84	94

年間総受診数 1,016人

主な診療対象疾患：

胆道閉鎖症、胆道拡張症、胆汁うっ滞症、B型肝炎、C型肝炎、慢性肝炎(自己免疫性肝炎、輸血後肝炎、TTV肝炎など)、脂肪肝・肥満症、代謝性肝疾患、門脈異常、潰瘍性大腸炎、消化性潰瘍(胃潰瘍、急性胃粘膜病変、十二指腸潰瘍など)などの内科的診療。及び外科疾患、肝生検、消化管内視鏡検査に関しては、小児外科、移植外科、消化器内科と連携を取りながら診療を行っている。

## 9) 新生児フォローアップ・シナジス外来

医師：河野 由美、高橋 尚人、矢田 ゆかり、

本間 洋子

診療実績：

新生児フォローアップ

1月	2月	3月	4月	5月	6月
227	202	232	200	203	211
7月	8月	9月	10月	11月	12月
225	290	193	203	169	186

年間総受診数 2,541人

シナジス外来

1月	2月	3月	4月	5月	6月
38	36	52	—	—	—
7月	8月	9月	10月	11月	12月
—	—	—	26	26	32

年間総受診数 210人

主な診療対象：

NICU退院児を主な対象とした新生児フォローアップ外来は、4名で計8コマを担当している。対象はNICU退院児で生後1か月から小学校3年生まで長期フォローアップを行っている。診療内容は成長・発達の健診とともに合併症の治療・精査、必要な養育支援である。外科系診療科、心理、リハビリテーション部門と連携して包括的な診療を行っている。新生児難聴スクリーニングの精査・フォローも行っている。冬季に行われるRSV重症化予防のために別棟で設置したシナジス外来で210人、

新生児外来ではほぼ同数例にパリビズマブを接種した。

10) 小児血液・腫瘍外来

医師：森本 哲、柏井 良文、中村 幸恵

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
138	131	162	129	101	145
7月	8月	9月	10月	11月	12月
133	177	123	133	103	138

年間総受診数 1,613人

主な診療対象：

急性リンパ性白血病（ALL）や急性骨髄性白血病（AML）、若年性骨髄単球性白血病（JMML）、悪性リンパ腫、慢性骨髄性白血病などの血液腫瘍疾患、神経芽細胞腫（NBoma）やウイルス腫瘍、横紋筋肉腫、網膜芽腫などの悪性固形腫瘍、ランゲルハンス細胞組織球症（LCH）や血球貪食性リンパ組織球症の組織球症、血友病や特発性血小板減少性紫斑病、遺伝性血栓症などの凝固系疾患、再生不良性貧血や遺伝性球状赤血球症、サラセミアなどの赤血球系疾患、慢性良性好中球減少症や重症複合型免疫不全、慢性GVHDなどの白血球・免疫疾患。

2009年の新規腫瘍性症例は、ALL 3例、AML 3例、JMML 1例、LCH 2例、NBoma 2例であった。

11) 小児喘息外来

医師：佐藤 優子

診療実績：（延べ人数）

1月	2月	3月	4月	5月	6月
56	54	69	59	55	56
7月	8月	9月	10月	11月	12月
66	58	59	65	71	60

年間受診数 728人

主な診療対象：

気管支喘息、運動誘発喘息

発作重症度としては、中等症および重症持続型の患児が大半を占め、心疾患や神経疾患を合併している患児も多く診療している。気管支喘息を基礎疾患にもつ外科的手術を要する患児の喘息評価なども行っている。

薬物療法としては、発作重症度にあわせた早期からの吸入ステロイド薬導入をすすめるとともに、環境整備や喘息教育を行っている。

12) アレルギー外来

医師：佐藤 優子

診療実績：（延べ人数）

1月	2月	3月	4月	5月	6月
28	29	35	28	28	35
7月	8月	9月	10月	11月	12月
28	28	30	28	35	29

年間受診数 361人

主な診療対象：

食物アレルギー、アナフィラキシー、薬物アレルギー、口腔アレルギー症候群、食物依存性運動誘発アナフィラキシー、好酸球性腸炎、アトピー性皮膚炎、化学物質過敏症など

近年増加傾向にある食物アレルギー児に対して、原因食物の特定や除去食導入を行い、栄養指導や薬物療法、食物負荷試験を施行している。

アナフィラキシーに対する急性期の治療と、エピペン処方を行っている。

また、食物アレルギーのある患児に対する麻疹風疹ワクチン（MRワクチン）やインフルエンザワクチン接種を随時施行している。

13) 小児膠原病外来

医師：森本 哲

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
31	30	30	38	29	24
7月	8月	9月	10月	11月	12月
33	39	30	43	30	47

年間総受診者数 404人

主な診療対象：

若年性特発性関節炎（JIA）、全身性エリテマトーデス（SLE）、シェーグレン症候群（SS）など。

2009年の主な新規症例は、JIA 8例、SLE 5例であった。

14) 胎児心エコー外来

医師：白石 裕比湖

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
6	5	6	3	1	2
7月	8月	9月	10月	11月	12月
1	2	1	6	5	2

年間総受診数40人

主な診療対象：

胎児の左心低形成症候群、三尖弁閉鎖症、両大血管右室起始症、Fallot 四徴症、完全大血管転位症、多脾症候群、心臓腫瘍、不整脈など。

その他：

院内産科あるいは産科開業医から紹介された、胎児に先天性心疾患や不整脈を持つ妊婦において、胎児心エ

コー図検査による出生前診断を実施した。

### 15) 1ヵ月健診

乳児健診は原則当院産科から退院した生後1ヵ月児の健診を行っている。また新生児マスキューニングの結果を外来で家族に説明している。

1月	2月	3月	4月	5月	6月
92	65	83	53	69	81
7月	8月	9月	10月	11月	12月
64	93	98	74	70	76

年間総受診数918人

### 16) 夜間・休日診療

診療実績：夜間、休日に受診し、小児科医が診療した患者数

1月	2月	3月	4月	5月	6月
448	288	288	302	405	349
7月	8月	9月	10月	11月	12月
286	273	304	31	435	435

年間総数 4,132人

### 17) 心理検査・心理面接

臨床心理士：稲森 絵美子、星子 真美、山田 莉沙

診療実績：

心理検査件数

1月	2月	3月	4月	5月	6月
48	35	33	33	29	35
7月	8月	9月	10月	11月	12月
47	65	40	48	39	33

年間総検査件数 485人

心理面接件数

1月	2月	3月	4月	5月	6月
123	105	121	123	113	135
7月	8月	9月	10月	11月	12月
122	113	121	139	143	129

年間総面接件数 1,487人

主な対象：

検査内容は、神経外来からの知能・発達検査、新生児外来からの極低出生体重児のフォローアップのための発達検査の依頼が主であった。心理面接では、心身症、不登校などの適応障害、発達障害児の二次障害への対応等を行っている。患児に対しては、カウンセリング、プレイセラピー、動作法を行っており、家族の相談にも併せてのっている。依頼件数は漸増傾向にある。

### 3-2. 小児科入院診療

小児科は2A病棟（急性期病棟）、4A病棟（慢性期病棟）に分かれている。一部3A病棟にも主に循環器疾患の症例が入院している。また母子周産期総合医療セン

ターNICUの入院もあわせて報告する。

超重症児受け入れは、2A病棟では受け入れなし。4A病棟では、在宅人工呼吸器療法を必要としている小児で、かつ小児慢性特定疾患研究事業参加者を対象にレスパイト入院を受け付けている。平成21年の入院患者数は9人（2.47%）。

超重症心身障害児は、2A病棟では受け入れなし。4A病棟では356人中13人（3.62%）。

#### 1) 月別病棟新入院患者数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月
2A	56	61	57	53	42	37
3A	5	4	4	7	7	3
4A	27	32	29	31	32	34
計	88	97	90	91	81	74
	7月	8月	9月	10月	11月	12月
2A	40	37	62	73	52	58
3A	4	3	2	5	3	3
4A	30	35	25	29	28	24
計	74	75	89	107	83	85

2A + 3A + 4Aの総計年間入院患者数 1,034人

#### 2) 入院患者の疾患別内訳（人数）

	疾患名	病棟		
		2A	3A	4A
1	先天異常・遺伝疾患			
	先天性奇形症候群	3	2	14
2	先天代謝異常症	5		7
3	感染症			
	ウイルス感染症			
	RSウイルス	24		1
	インフルエンザ	5		2
	単純ヘルペス	1		
	HIV	1		
	その他	5		
	細菌感染症			
	敗血症	5		1
	化膿性頸部リンパ節炎	3		
	蜂窩織炎	7		
	急性中耳炎	3		
	ブドウ球菌	4		
	溶連菌	1		
	マイコプラズマ感染症	2		
4	免疫疾患・膠原病			
	血管性紫斑病	1	1	5
	若年性特発性関節炎	3		3
	その他	2		3
5	アレルギー性疾患			
	気管支喘息	70		2
	薬剤、食物アレルギー	1	1	3
6	呼吸器疾患			
	クループ症候群	8		1

	急性気管支炎	64		5
	急性咽頭炎・扁桃腺炎	19		1
	急性細気管支炎	22		
	肺炎	87		3
	嚥下性肺炎	8		
	百日咳	1		
	無呼吸症候群	1		4
	気胸	1		
	周産期慢性呼吸器疾患			4
	膿胸	2		
	その他	2		
7	神経疾患			
	熱性痙攣	24		4
	軽症胃腸炎に伴うけいれん	5		
	てんかん	17	1	20
	急性脳炎	2		1
	インフルエンザ脳症	1		
	その他の脳症	8		
	ウイルス性髄膜炎	2		
	細菌性髄膜炎	4		1
	運動ニューロン疾患	2		5
	ミトコンドリア異常症	3	1	
	Leigh症候群	7		
	脳性麻痺			6
	脳腫瘍	1		2
	水頭症	1		
	筋疾患			9
8	精神・心理疾患			
	心身症	2		
	その他	13		3
9	循環器疾患			
	先天性心疾患			
	チアノーゼ型	12	18	54
	心房中隔欠損			19
	心室中隔欠損	2	2	15
	その他	3	3	15
	不整脈	1	1	3
	心不全	1		
	川崎病	36		6
	心膜炎	1	2	1
	原発性肺高血圧	4		3
	その他			4
10	消化器疾患			
	急性胃腸炎	35		1
	腸閉塞	1		
	胃十二指腸潰瘍	1		1
	急性膵炎	2		
	潰瘍性大腸炎	1		6
	腸重積	2	1	
	胆道閉鎖症	1		
	急性肝炎	5		
	その他	5	11	7
11	血液・腫瘍疾患			

	特発性血小板減少性紫斑病	1		10
	血友病			4
	血球貪食症候群	2		2
	組織球症	1		
	ランゲルハンス細胞組織球症			15
	急性リンパ性白血病	1		14
	急性骨髄性白血病			7
	固形腫瘍		1	6
	再生不良性貧血			
	好中球減少症	1		
	溶血性貧血	1		1
	その他			13
12	腎泌尿器疾患			
	急性腎盂腎炎	33	2	
	急性糸球体腎炎	5		1
	慢性糸球体腎炎			9
	IgA腎症			4
	ネフローゼ症候群	1		8
	紫斑病性腎炎			5
	泌尿器外科疾患		1	
	その他	1		6
13	代謝・内分泌疾患			
	糖尿病	2		1
	低身長	1		2
	尿崩症	1		
	先天性副腎過形成	1		
	有機酸代謝異常症			1
	その他		1	2
14	整形外科疾患		1	1
15	中毒・事故・外傷			
	被虐待児症候群			1
	頭部外傷			1
	薬物中毒	1		
	ALTE		1	
	その他	3		2
16	外科系手術入院	2		

### 3) 新生児集中治療部 (NICU) の入院実績

(一部再掲)

年間入院数355人(再入院2人含まず)

出生体重(BW)別、在胎週数(GA)別入院数および死亡数を示す。人工呼吸症例数は139人(全入院の39.2%)で、NICU入院中に手術を行った外科症例(外科転科直後手術例ふくむ)は39人、動脈管結紮術施行1人、死亡退院は14人であった。低出生体重児(1,500g未満)の死亡率は7.0%であった。

GA (W)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
22	1	0	1	0.0
23	0			
24	5	3	2	60.0
25	2	2	0	100.0
26	3	3	0	100.0
27	7	7	0	100.0
28	11	11	0	100.0
29	10	9	1	90.0
30	8	7	1	87.5
31	12	12	0	100.0
32	16	16	0	100.0
33	20	20	0	100.0
34	26	26	0	100.0
35	33	31	2	93.9
36	28	27	1	96.4
37以上	173	167	6	96.5
計	355	341	14	96.1

BW (g)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
<500	3	2	1	66.6
<750	9	8	1	88.8
<1,000	10	8	2	80.0
<1,250	17	17	0	100.0
<1,500	18	18	0	100.0
<1,750	29	27	2	93.1
<2,000	46	43	3	93.4
<2,500	60	58	2	96.7
>2,500	163	160	3	98.1
計	355	341	14	96.1

### 3-3. 主な検査・特殊治療

#### 1) 心臓カテーテル検査

総数109件であった。対象疾患は心房中隔欠損21件、心室中隔欠損17件、Fallot四徴16件、完全大血管転位14件、両大血管右室起始6件、房室中隔欠損5件、総肺静脈還流異常4件、大動脈縮窄/離断4件、Ebstein 奇形/三尖弁異形成4件、修正大血管転位3件、川崎病3件、その他12件であった。カテーテル治療は19件で内訳はバルン血管形成術7件、心房中隔裂開術6件、コイル塞栓術4件、バルン弁形成術2件であった。

#### 2) 腎生検

腎疾患については、2009年に、17件の腎生検を行った。

#### 3) 造血細胞移植

2009年に造血細胞移植を4回行った。内訳は、AML 2例に対し同種骨髄移植が3回(非血縁2、血縁不一致1)、NBoma 1例に対し自家末梢血幹細胞移植が1回であった。

#### 3-4. 小児科カンファレンス

毎週火曜日、水曜日、金曜日の朝、新入院患者の紹介と討議、水曜日午後の教授回診にて入院患者の病状報告と討議を行った。

小児科における症例検討会(CC)は毎週木曜日午後6時からカンファレンス室で病棟入院例を中心に検討会を行った。以下症例検討会のテーマと担当を示す。

日時	テーマ	担当
1月15日	短腸症候群に対する長期中心静脈栄養中にカテーテル感染を契機に敗血症を呈し、高サイトカイン血症を来した女児	青柳、横山
1月29日	Fallot四徴症術後の不明熱、感染性心内膜炎疑いの1例	井上
2月12日	9日間続く発熱、腹痛、頸部痛、著明な炎症反応上昇を呈し診断及び治療に難渋した1例	増澤、岡
3月5日	小腸壊死を来したSplanchnic vein thrombosisの5歳女児例	英、早川
4月9日	生後1か月で高乳酸アシドーシス、高サイトカイン血症に対してステロイドパルス療法を施行し、現在は乳児難治性下痢症を呈している1例	増澤、岡
4月23日	肺動静脈瘻と門脈体循環シャントを合併し、低酸素血症が遷延している1歳4か月の女児	青柳、川原
4月30日	髄膜炎菌性髄膜炎の1例	富士根、池田、鈴木
5月21日	ハンター症候群 酵素補充療法4症例提示	俣野
5月28日	造血幹細胞移植	森本
6月4日	胆道閉鎖症を合併した心房臓器錯位(右側相同)の1例	長澤、早瀬
6月11日	再発熱が遷延したインフルエンザ桿菌(BLNAR)による細菌性髄膜炎と当科におけるインフルエンザ桿菌による細菌性髄膜炎のまとめ	長嶋、杉山

6月18日	急性心筋炎に経皮的心肺補助装置を要した1例	門脇、谷口、門田、片岡
6月25日	食物アレルギーを合併し、慢性下痢症を契機に診断に至った全身性エリテマトーデスの1例	八木、増澤
7月2日	子どもの排尿機能とその異常	小児泌尿器科 中井秀郎教授
7月16日	急性下痢症で発症した急性炎症反応高値を呈する2か月男児の一例	門田、宮内
9月17日	無呼吸発作を反復する乳児例	古井、谷口、佐藤（優）
10月1日	小児期発症の結節性多発動脈炎（PN:Polyarteritis Nodosa）と考えられた1例	下澤、榎澤、南
10月15日	喘息発作入院加療中に両側尿路結石から急性腎後性腎不全をきたした4歳女児	山中、斎藤
10月22日	吐血を主訴に入院した便中H.Pylori抗原陽性の乳児例	勝部
10月29日	川崎病治療のガイドラインの紹介とγグロブリン不応例に対する治療の選択肢	南
11月5日	同種免疫性血小板減少性紫斑病（NAITP）が疑われる一新生児例	青柳、小林
11月12日	気管狭窄、気管軟化症を呈する21 trisomyの呼吸管理について	松本、佐藤（優）
11月19日	呼吸障害を伴う新型インフルエンザ当院入院例の検討	池田、宮内
12月3日	非血縁者間同種骨髄移植を施行したDEK-CAN mRNA陽性急性骨髄性白血病（M2）の1例	増澤、池田
12月17日	GBS髄膜炎の症例検討	植田、長嶋、宮内、勝部、門田、福田
12月24日	腹水貯留、血小板減少、貧血、肝機能障害、胆汁うっ滞が遷延している超低出生体重児の1例	五十嵐、川又

療機関との連携強化、④地域医療機関との連携による小児救急医療の役割分担の推進と小児三次救急医療の充実、⑤重症児の在宅医療地域ネットワークの構築、⑥小児科医育成の一層の推進を掲げる。

#### 4. 事業計画・来年の目標等

とちぎ子ども医療センター小児科は、小児の高度医療を推進することを使命とし、小児科疾患の診療のみならず、センターにおけるあらゆる診療部門との連携により小児の全ての疾患領域の高度医療に対して小児科としての診療を行う。次年度の目標として、①小児科専門診療部各領域における臨床研究を基盤とした小児高度医療の推進、難治性疾患の治療成績の向上、②小児慢性疾患診療における地域医療機関との治療ネットワークの構築、③小児科総合診療部における紹介制の徹底により地域医